

ぎすい
沂水ノ浴舎ニテ贈ル青山ノ子容ニ

これは石井鶴山の漢詩の題だそう。筆者はその漢詩を知らないが、城之崎温泉で詠まれたのなら、若干の想像が沸き立つ。

城之崎温泉の前にはまるやま円山川が流れていて、今も渡し船で玄武岩の柱状摂理をなす「玄武洞」に着く。唐の沂水は大河だが、風情としては、円山川は水調歌を詠むに相応しい。その玄武岩の山涯は圧巻である。



鶴山は、唐詩人の張子容ちやうしやうが玄武洞の「青山」を仰ぎ見て詩情を走らす様を想起しているのかも知れない。

或は、「子容」をこの崖壁の命名者である、鶴山と同じ儒学の碩学で、高松出身の柴野栗山りくざんに見立てて、親愛の情を送っているのかも知れない。

漢詩本文は、温泉宿の浴舎から、対岸を臨んで詠んだ漢詩でなないかと想像している。是非、読んでみたいものだ。

令和五年十一月三十日

大中勝博 記